



読書界 11月号

「ラストが衝撃な本」

『純喫茶「一服堂」の四季』 東川篤哉

鎌倉でひっそりと営業している純喫茶「一服堂」。そののエプロンドレスの美人店主、“安楽椅子”は恥ずかしがり屋で人見知り。しかし事件が起きるとガラリと人が変わり、聡明な頭脳が動き出す――。喫茶店の中で明かされていく事件のトリック。まさに安楽椅子の名探偵。「春」「夏」「秋」「冬」の四季ごとの4つの事件に分かれていて、短編集のような感覚でとても読みやすくなっています。もちろん事件のトリックも“衝撃”ですが、それとは別にまさにラストで衝撃を受けます。必ずあなたはこの“トリック”にひっかかってしまうでしょう。

2-9 田中結子

『ルビンの壺が割れた』 宿野かほる

「キャッチコピーが思いつかない。」これが、この作品の最も象徴的なキャッチコピーだ。ほんの少しもネタバレすべきではないのである。内容が公開されるや否や、賛否両論を呼んだこの作品は、人物像が見え隠れし、核心がつかめなまま物語はジェットコースターのようなスピードで展開してゆく。最後の一行を読んだあと、あなたはきっと読み返したくなるだろう。そしてその時には、“そうとしか見えない”はずだ。まさにルビンの壺のように…。まだ「割れていない」人は、是非。

2-3 小森星奈

『告白』 湊かなえ

「愛美は、このクラスの生徒によって殺されたのです。」

市立S中学校、1年B組の担任、森口悠子は三学期のそんなことを口にする。愛美というのは森口の娘。森口は犯人を「少年A」「少年B」と称して、淡々と話を続ける。この物語では、「担任」「犯人の友人」「犯人の親戚」……と、様々な人間の視点から事件の真相が浮き彫りにされていく。物語が進むにつれ、狂っていく人々。そんな狂っていく物語のラストには、「最大の恐怖」と「最凶の復讐と衝撃」が貴方を待っていることでしょうか。是非、読んでみてはいかがでしょうか……。

2-7 中尾貴介

『かがみの孤城』 辻村深月

あることがきっかけで不登校になってしまった主人公の女子中学生、安西こころ。彼女はある日、自分の部屋にある鏡が「お城」と繋がっていることに気づく。お城に集められたのは自分と同じような境遇の子供たち。そこに現れたのは「オオカミ様」を名乗る狼の面を被った少女。彼女は子供たちに鍵を見つけたらなんでも願いを叶えてやると、提案を持ち掛け……。現実世界とお城の中で揺れ動く彼らを待ち受ける結末とは!?

2-3 中西美沙

『天使のナイフ』 薬丸岳

妻は3人の少年によって殺された。あの事件から4年――妻が最期までかばい続けた5歳の娘と過ごしていた穏やかなある日、妻を殺した少年の一人が殺される。それから事件は再び幕を開ける。以前の発言のせいで疑われる主人公。騒ぎが収まったと思ったのも束の間、他の少年たちにも陰が忍び寄る。妻の隠していた秘密を探っていたある日、事件は本当の終結へと動き出した――

この作品は少年犯罪とその制度への疑問も綴っている。ぜひ一度考えてみてほしい。

1-3 田辺よしの